

平安

小島信夫

講談社

平あ安ん

一九八六年五月二十日 第一刷発行

著者——小島信夫

© Nobuo Kojima 1986, Printed in Japan.



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号三三 電話東京三—九四—二二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-06-202554-X (0) (文1)

目次

白昼夢

5

肖像

43

戦友会

81

マリフ

123

予兆

163

平安

201

あとがき

240

初出一覧

244

装
幀

山
崎
登

平
安

白昼夢

今年の八月十五日に、私は、私の伝記を書こうとしていることになっている平光善久の家に泊った。この日は、いわゆる終戦記念日に当るのだが、そんなことよりも、たまたまフェーン現象というやつが、私の郷里をおそい、三十九度になった。暑いのでだらけるように思えるが、じっさいは、異常に緊張した。

昼間街の中でしたが、建物から外に出るとき、無防備で吹雪のなかへとび出して行くような錯覚がおきた。夜寝る時間に友人の家にやってきたが、眠れそうにもなかった。

もともと枕を並べて話をしているうちに、いつのまにか、主人の返事がなくなり、

「それではやすむことにしよう」

と、かすかに、主人の返事がきこえるという順序である。だがその夜は横になるのをあきらめて、ガラス戸をあけはなした縁側に坐った。

暗がりだから見えないが、庭の向うにタンボがあり、農道があり、民家が何軒もあり、ずつと彼方に昔の兵舎のあとがあり、兵舎の一つに入った私立の女子高校などがことによつたら、そのまま建っているのかもしれない。いずれにしても地面も空も熱気がかすんでいた。

主人はいった。

「先生のへメール・ボックス」という短篇のなかに、あつい日に道ばたに立てられたメール・ボックスへ日本からの航空郵便をとりに行くところがありました。あれほどのくらしいの距離ですか」

「そうね、百メートルぐらいのつもりだったのだけど」

主人は机のそばにいざりよつて手帖を取つてきて、その中へ書きこんでいるのを横眼でみた。

「ぼくは、先生みたいな主人公が奥さんから来た手紙をそのまま持ち帰つてきて、二階の部屋でよむところが面白かった。三疊か四疊半ぐらいの小さい部屋で、ゴトゴト音を立てている黒い扇風機を先ず止めるのだったと思います」

「あなたが面白いというのは、たぶん、ほんとうは手紙の文面のことや、文面を読んでがっかりするところではなかっただろるか。主人のことを思つたり、子供が育つて行くことなどが、つまりそういう甘いことが書いてあると思つて読みはじめると、送りとどける品物のこと

や、金を送ってくれるようにといったことが書いてある。電話口に出ると、用事だけいって、ハイ、サヨナラ、といったふうなのですね。ぼくはあれは彼女の愛情の表現だったようにも思う。

たぶんぼくの方は、先便か先々便かで、あるいは乗船するさいに、困ったことがあったら何でもいってくるように、といったのかもしれない。

ぼくは、たしかに期待外れでびっくりもしたけれども、いわれたとおりにしているうちに、身体のかなからこみあげてくるものがあつた。ミルクを飲む人形というものが、注文の一つだつた。ぼくのいた町の人形店にはなかつたので、州都へ出かけて行つた。そこにもなかつたので、ぼくの住んでいた町の人形店からあらためて注文してもらつた。ぼくは、出発する前に一応は金銭の不自由のないようにしておいた」

「二人の子供さんがいるのだし、予定外の物入りというものはあるものですから」と平光善久はいつた。

「その通りです。そう、手紙にも書いてあつた。ぼくのとてがわれた金は僅かなものだけだけれども、ぼくを下宿させているアメリカ人もぼくの懐工合と相談して下宿代をきめてくれた。ぼくは田舎にいたので、金は余らないわけではなかつた。だから、その中から出来るだけ送つた。すると、そのことが楽しみになつた。ぼくは自分のしていることが好きではなかつたにち

がないのだけど」

「先生は、奥さまが亡くなった直後、郵便の来たことを思い出して書いておられる。あのミルクを飲む人形の注文が最初で、そのあと色々続いたのだろうと思います。そういうふうには書いてはなかったのですけど」

「そのとおり、続けました。メイル・ボックスはぼくの泊っていた家によって色々変っていた。はじめの農家は、馬車の車輪を門柱代りにおいたところに立っていた。同じ農家でも門柱さえないところもあった。メイル・ボックスそのものが門柱の役をしていた。こんなこと、どうでもいいことだけれども。町へ行つてからは、どこもかしこも赤いボックスだった。そこへブルーの制服を着た配達夫がスクーターに乗ってやってくるというぐあいだった」

「ぼくは先生に、住宅地と並木と赤い郵便受けと、落葉のスライドを見せてもらったことがあります。あれは絵になると思いました」

「絵以上だよ」

「それはそうですけど」

二人は、笑った。そのあとしばらく黙って、汗をふいた。

「ぼくは何でも先生のいわれることは、素直にきいておきます。取捨選択はぼくがやらせていただきます。先生の存命中かどうかは分りませんが、あしからず」

「あなたは昭和二十年の八月十五日にはどこにいた。病院？」

「そう、病院です。二回めの手術がすんで三ヵ月たっていました」

「ぼくは小包などは町の郵便局へ持って行ったが、手紙はなるべく配達夫が集めてくる時間にポストに持って行くことにしていた。みじかい時間に話をした。その男は戦争中日本にいた、といった。何しろ終戦から十二年しかたっていなかったからね。手紙が日本にまで運ばれることが信じられない、というような顔をしてみせた。たぶん愛想だったし、彼の誇りだったかもしれない。戦地で受けとった郵便の話をはじめた。もっとも、あるひとりの配達夫のことをいっているのですが。ぼくは一月毎に下宿先きを変ったものだから、そう親しくなれなかったし、親しくなったといっても、今いった程度のことなのだけど。

さっきもいったように、ぼくは小包や、金を送る度に、安堵し、たぶん愛情に似たものがこみあげてくるのをかんじ、手応えをかんじていたのだろう。

考えてみると、彼女はずっと死ぬまで注文をしつづけたみたいだった。注文をして、それが満たされると安心したみたいに見える」

「ぼくはお会いしたことなしに終ったのですが、それは失礼ですが十分に満たされたのではない、ということなのでしょうか」

「うまいことをいいますね」

「だって、ぼくは先生の小説の方から先生を研究していますから。ちょっときいてください」
友人は憎らしいほど生き生きと、暑さにもめげず話しだした。

「いつだったか天井から冷房の風がふいてくる新宿の地下道を、人波をよけるようにして歩いて行くと、あるカメラの宣伝のスライドが、ショウ・ウインドウいっぱいに拡大してありました。テレヴィのコマーシャルにも度々出てきたが、その同じコマーシャルの中のある場面だけが、今いったように拡大されているのでした。

アメリカの女が若い学生ふうの男たちの中にひとりだけいて笑っている。みんな肩を組んでいたようにおぼえています。彼女はどこかで見たことがあるから、名のある女優にちがいないと思います。自動シャッターを切るようになっていて。こちらを向いて取りすましている。そのときバケツの水がみんなの頭からおちてくる。その女がバケツをひっくりかえしたのです。その直後にシャッターがおりた。だからとれた写真にはバケツの水が降り注いでいるのと、首をすくめている若い男たちと、もつとも快活に笑っている陰謀の張本人の女の笑い顔がうつっている。とこういのです。ぼくはコマーシャルで見たときから、ずっと気になっていました。もちろん、ぼくもこの女のこと嫌いではありません。男は心の中ではあるいは、好きだと思っているのかもしれませんが。でも、それは心の中だけのことでしょう。ぼくはいつだったか、東京の詩人仲間との会のあと、あるバーへ行きました。先生が二三度来られたことが

あり、これからもまた来られるかもしれない、ということが、偶然分ってきました。そういえばその店の名が先生には分ってきたと思います。いかがですか」

「何をいい出すか、ということは残念ながら分らない」

「たぶん分っているつもりです。だが、あなたかぼくのことを友人が紹介したのです。それから先生の作品のなかに登場してくる先生と同郷の義足の詩人だ、といったりしました。もちろん、先生のことが何かの拍子に話題になっていたからです。彼女は、作品の中のぼくを知っていてくれました。ありがたいとばかりはいえませんが。話はとびましたが彼女のことを何故ぼくがふれるかは、あとで申しあげます。彼女はぼくに気を許したせい、か、こういいました。本人を眼の前においていうとなると、いわれる方はテレくさいでしょうが、かんべんしてください。

『先生は私と結婚するところだったのよ。今から二十年前の話なの。そのときは私がどんなに若かったか、魅力的だったか、想像できるでしょう。出来ない？　出来ない人はムリにでもその気になるのよ。これは本当のことなんだから。私は今夜は酔ってるけど、シラフだって同じなんだから』

『もっとくわしく話してくれなくてはテンデ信用できない』

とぼくは水を向けました。物語のように話しますから、そのつもりでいてください」

「あなたのいいように」

と私はいった。

「『先生は奥さんをなくして再婚されてからしばらくして、私の勤めていた店へ来てくださって、あるとき、そう洩したんだから。私には分るのよ。先生はいいかげんでそういわれたのではない』ということが』

『そんなことアテになるものか』

とぼくはいいましたよ。すると彼女はこういうふうにいいました。

彼女はさっきもぼくがいったように三度でしかお会いしたそうですが、何年に一度ずつというぐあいです。その度に彼女は客のいる前で、この話をくりかえしてきたそうです。七、八年前、別の店をやっているとき、先生が来られたそうです。そのとき先生はお友達と五、六人でやってきたのですが、座席がなかったそうです。そこで近所の喫茶店で待たせて、そこへ彼女は行ったそうです。そこで彼女は黒っぽいスラックス姿だったそうですが、あなたのところへ来ると、

『ねえ、ねえ、私って今でもステキでしょう』

とファッション・ショウのモデルさんみたいな恰好してみせたそうです。そのとき、『何だ』という顔をした人もいたそうですが、『フン、何さ、先生には分るんだ、私って人間のことが』